

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	A0入試の何が変わり, 何が変わらなかったか : 広島大学A0入試の10年 <ノート>
Author(s)	杉原, 敏彦; 高地, 秀明; 永田, 純一
Citation	大学入試研究ジャーナル , 25 : 117 - 122
Issue Date	2015-03
DOI	
Self DOI	
URL	http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00038472
Right	Copyright (c) 大学入試センター
Relation	



AO 入試の何が変わり、何が変わらなかったか

——広島大学 AO 入試の 10 年——

杉原敏彦，高地秀明，永田純一（広島大学）

広島大学で AO 入試を開始して 10 年，この間，導入当初の制度設計から変更した点もあれば，現在に至るまで変わらない点もある。大学入試センター試験を課す入試方式（AO 入試Ⅱ型）への移行や入試期間の短縮等当初から変更した点は，より適切な入試制度として変更が求められたものであり，入試時期等当初からずっと変わらなかった点は，本学の AO 入試制度として適切であったものと言える。このような観点からの入試制度の検証と入学者の学業成績の追跡調査等から，現時点での本学 AO 入試の成果と課題をまとめる。

1 はじめに

広島大学で AO 入試を開始して 10 年が経過した。正確に記述すれば，一部の募集単位で AO 入試を始めて 13 年，全学で方式を統一して一斉に実施して 9 年である。AO 入試を実施した国立大学としては歴史的に第 2 グループの一つであるが，全学にわたって，相当の募集人員を配して AO 入試を実施している大学は数少ない。この 10 年の間に，導入当初の制度設計から変更したところもあれば，現在に至るまで変わらないところもある。10 年を節目として，AO 入試の総括をしておきたいと思う。

本稿の構成としては，第 2 節で広島大学の AO 入試の現状について概観する。第 3 節では，その AO 入試がこの 10 年間で何が変わったのか，変更点とその背景をまとめる。第 4 節では，飛び入学とかかわりの深い一部の AO 入試を休止したことについて経過を述べ，飛び入学を円滑に実施するための要素についても考察する。第 5 節で，この 10 年間で変わらなかった点をまとめる。こうして AO 入試には様々な実施内容・方法等があるものの，変わらぬ本質的な理念や役割は何なのか，検討する。

こうした記述は，一大学で行われた AO 入

試の歴史と言えるが，それに止まらず他大学にとっても AO 入試の課題と展望を読み取ることには役立つのではないかと考える。

2 広島大学の AO 入試の現状

2.1 広島大学の AO 入試

広島大学では，平成 17 年度入試以前は，学部・学科等の募集単位によって，推薦入試を実施したり，いち早く AO 入試を実施したり，一般入試の他には何も実施しなかったりと様々であった。平成 18 年度入試から，こうした学部や募集単位ごとの多様な状況を統一して，すべての募集単位で一般入試と AO 入試を実施することを基本型とした。

平成 18 年度導入の広島大学 AO 選抜（導入当時の呼称）は，大きな区分として総合評価方式，対象別評価方式及びフェニックス方式の三つに分けられる。対象別評価方式は帰国生及び社会人を対象にした AO 入試であり，フェニックス方式は中高年者を対象にした AO 入試である。

総合評価方式は，高校生が受験する AO 入試の中で最も一般的な方式であり，すべての学部（11 学部）の合計 38 の募集単位で，募集人員 295 人として実施している。

全学で一斉に AO 入試を実施するに当たっ

て、全学で統一した一つの方式で実施するのではなく、三つの型（Ⅰ型、Ⅱ型及びⅢ型）を用意し、学部・学科（募集単位）の側で型を選ぶことにした。AO入試の統一以前に各学部・学科で実施していた前身の入試方式から円滑に移行するためでもある。

2.2 総合評価方式の三つの型

2.2.1 AO入試Ⅰ型（大学入試センター試験を課さない入試）

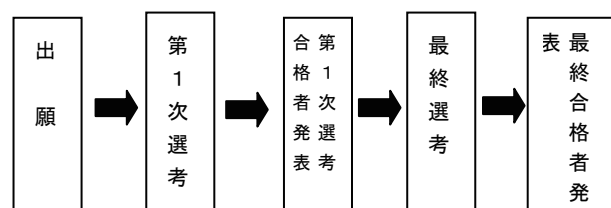


図1 AO入試Ⅰ型のプロセス

第1次選考：出願書類（調査書，自己推薦書，課題レポート等）により選考する。

最終選考：小論文や筆記試験，面接，実技などを総合して選考する。

2.2.2 AO入試Ⅱ型（大学入試センター試験を課す入試）

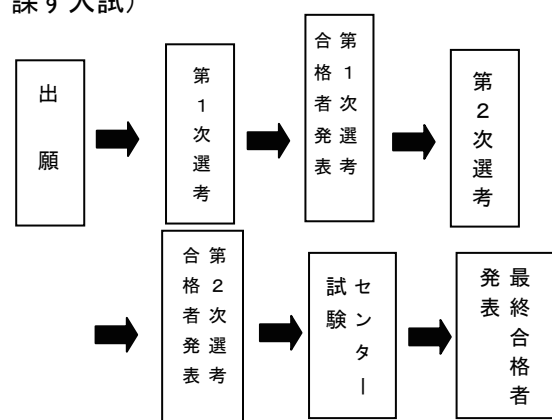


図2 AO入試Ⅱ型のプロセス

第1次選考：出願書類（調査書，自己推薦書）により選考する。

第2次選考：小論文や面接を総合して選考する。

最終選考：大学入試センター試験の指定した

科目の得点の合計が合格基準点以上であった者を最終合格者とする。

2.2.3 AO入試Ⅲ型（ゼミナール（授業）への出席を課す入試）

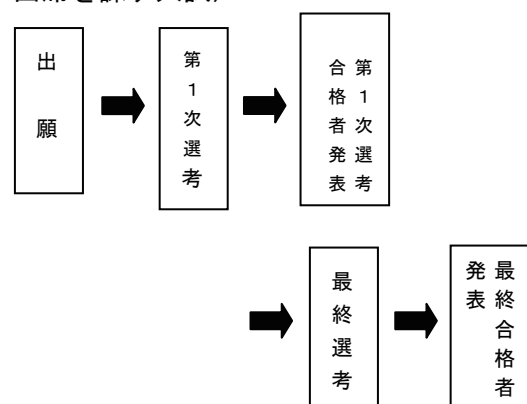


図3 AO入試Ⅲ型のプロセス

第1次選考：本学教員が行う分野別ゼミナール（授業）の受講，ゼミナール終了後に課す総合問題，出願書類（調査書，自己推薦書）を総合して選考する。

最終選考：ゼミナール開設分野ごとに面接を行う。

3 変更された点

3.1 AO入試Ⅲ型の一部休止

前節で示したとおり，本学のすべての募集単位がいずれか一つの型式を選びAO入試を実施するという制度設計であったが，Ⅲ型（ゼミナール選考）を実施していた一つの募集単位で，この入試方式による学生募集を取り止めることになった。このことについては，飛び入学（早期入学）ともかわりがあるので，その背景・要因も含めて次節で述べる。

3.2 科学オリンピックの利用と出願資格の制限

理学部化学科，生物科学科，地球惑星システム学科，医学部医学科及び生物生産学部生物生産学科では，AO入試導入の数年後から

科学オリンピックを利用するように入試制度を変更した。利用の仕方としては、科学オリンピックの受賞者等一定の要件を満たしていれば相応の評価を加えるというところもあれば、科学オリンピックの予選通過等をAO入試の出願資格とするところ等様々である。

特に医学部医学科では、当初一般入試と同様将来の臨床医志望者も含めてAO入試を実施していたが、平成23年度入試から、アドミッション・ポリシーを医学研究者志向に限定し、出願資格は入学後MD-PhDコースへの進学を確約できる者で、6種の科学オリンピックの予選通過者等という条件を付すことにした。

このような変更は、アドミッション・ポリシーの明確化と先鋭化を実現しているが、それに伴って出願対象者自体を一挙に狭めることになる。このような限定こそAO入試が入学者選抜全体の中で果たす機能と役割であると言い切ることができるのか、大学の置かれている状況や高校（進路指導の上で）との関係によって、大学や募集単位ごとに違っているように思える。

3.3 AO入試Ⅰ型からⅡ型への変更

次に、これまでAO入試実施の型を変更した募集単位が7つある。いずれもが平成18年度入試ではAO入試Ⅰ型（大学入試センター試験を課さない入試）であったものを平成26年度入試までにⅡ型（大学入試センター試験を課す入試）に変更している。変更理由は共通に、入学者の追跡調査をみると学力担保の必要があり、そのため基礎学力を確認することの可能なⅡ型に移行するというものである。大学入試センター試験を利用することについては、AO入試本来の志願者の意欲・関心等の見極めから遠ざかるとの意見もあるが、高校卒業の最終段階まで「学校ぐるみ」の学習指導・進路指導が継続することとなり、殊に進学校からの支持が高いことも、

この移行を後押ししたように思う。²⁾

3.4 入試期間の短縮

AO入試への出願受付開始から最終合格者の発表まで、例えばAO入試Ⅰ型を例にとると、平成18年度入試では10月3日から12月9日まで2か月と1週間かかっていた。それが、平成26年度入試では、10月7日から11月29日までの1か月と3週間に縮まった。受験生や高校にとっては、合否が決まるまでの期間、他大学の入試、他入試方式への参加をペンディングしなければならない心理的な負担は大きいものと考えられる。入試期間の短縮は、高校からの要望にも合致したものである。

3.5 AO入試Ⅲ型の実施時期を遅らせる

AO入試Ⅰ～Ⅲ型のうち最も出願受付時期が早いのはⅢ型で、導入当初、6月にゼミナール受講受付をして第1回ゼミナールを7月中旬に実施していた。第2回のゼミナールは、文学部が8月下旬、理学部が9月上旬である。これは、第1次選考合格者に第2次選考での発表資料を作成させるためには、高校の夏休みを充てるのがよいとの判断であった。しかし、文部科学省の全大学への指導もあって、ゼミナール受講受付を8月に変更するとともに、第1次及び2次選考間のインターバルも短縮した。

3.6 AO入試Ⅱ型の基準点の表示及び扱いの柔軟化

AO入試Ⅱ型において、最終合格者の要件である大学入試センター試験基準点については、同試験の最低限の得点を明示することとした。入試実施の前にこの得点を固定した数値で明示することは、公正な入試にとって必要な要件と考えられた。ところが、何度かこの型のAO入試を経験するうち、大学入試センター試験の難易の変動によって、特に平均

点が前年度に比べ数十点低下した年度などは、最終合格者数が著しく減少し、募集人員を確保できない状態が出来た。そこで、大学入試センター試験の平均点の上下動を考慮に入れ、基準点の表示の仕方を「概ね〇〇〇点」と修正し、柔軟な取扱いをすることにした。

3.7 AO入試Ⅱ型における合否判定の総合的な取扱い

大学入試センター試験の難易の変動によって、年度によってAO入試Ⅱ型の最終合格者数が著しく減少する状態が出来たことについては、もう一つ次のような対策を立てた。AO入試Ⅱ型は、面接、小論文等の第2次選考実施後、大学入試センター試験の前に第2次選考合格者を発表し、その合格者が最終関門として大学入試センター試験の基準点をクリアすべく努力するという設計であったが、新しいやり方として大学入試センター試験の前には合格者を発表せず、大学入試センター試験実施後に最終合格者を発表することにした。次の図4参照。

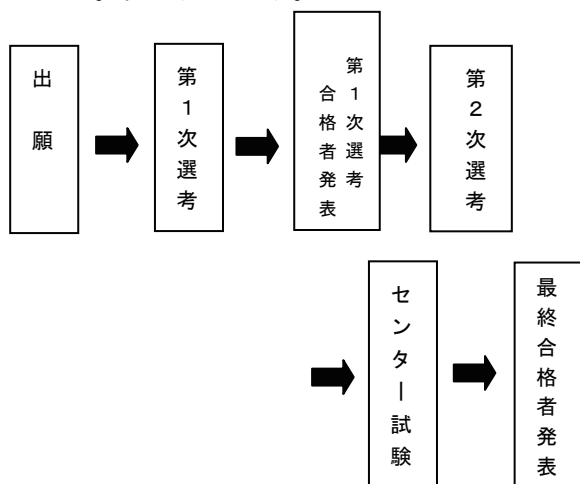


図4 変更後のAO入試Ⅱ型のプロセス

4 AO入試Ⅲ型と飛び入学

理学部物理科学科のAO入試Ⅲ型は、平成18年度から23年度まで6年間実施した後、休止した。このAO入試Ⅲ型は、講義・

演習・実習・討論等様々な形式の活動からなるゼミナールに志願者を参加させ、ほぼ丸一日、教員にとっては志願者の活動を観察するもの、志願者にとっては大学教員と行動をとにもするものである。これにより、志願者と大学の双方にとってマッチングが確認できる。このゼミナールには高校3年生は当然として、その他に高校1、2年生についても参加可能として制度を設計した（実際に高校2年生以下の参加者も見られた）。

ところで、本学の国立大学法人第一期中期計画には、飛び入学の導入が記載されていた。飛び入学を導入することは、当時社会的にも歓迎されると同時に大学にとって先進性をアピールする施策の一つとなった。そして、学内的に飛び入学の実施学科として期待されたのが理学部物理科学科であり、当時本学では飛び入学と入試改革とが同時に進められていた。こうして、物理科学科では飛び入学とAO入試Ⅲ型の制度設計が同時に模索されたが、両者は極めて近い関係にあり、出願資格を高校2年生に変えれば飛び入学のための入試が実施できるのであった。

だが、飛び入学は、現在に至るまで実施に至っていない。飛び入学を準備していた教員集団は、飛び入学は大多数の集団の中に高校生を1年早く入学させてしまうと「潰れる」者が出る、少数の「顔が見える関係」の中で教育を行うべきと考えた。そのためには、学科の中に、飛び入学導入予定の専門領域に関心のある学生のための特別なカリキュラム・コースを作り、それを飛び入学の受け入れ枠とすることが必須と考えたのである。だが、結局このような特別な受け入れ枠の設定は、大学全体の中では直ちには実施されず、その結果飛び入学の導入は時期尚早とされ、やがて同じ理念を持つ物理科学科AO入試Ⅲ型の休止に繋がった。

飛び入学、さらにはAO入試を成功させるためには、大きな枠の中で学生を受け入れる

のではなく、高校生の関心・得意分野をより限定した狭い枠で学生を募集し、その狭い枠の中で教育して初めてこの制度が生きるという仮説については、引き続いて議論して行きたい。

5 変更されなかった点

5.1 実施時期

この10年余りで本学のAO入試の開始時期はやや遅くなり、出願受付から合格者発表までの期間は短縮されたが、AO入試の実施時期が一般入試、推薦入試よりも早い時期に実施されることに変更はない。実施時期という観点からは、AO入試は一般入試の3～4か月前に入試が実施され、2～3か月前に可否が決定する（AO入試I型の場合）。この点で、一般入試志願者が受験勉強の途中時期にAO入試に出願し、AO入試合格のための準備をすることは、特に進学校では勧められていない若しくはそうしないよう指導されている。その結果、国立大学の場合、AO入試の対象者は高校生全体というよりもAO入試募集人員割合（本学で入学定員全体の約14%）くらいの高校生となり、その中から選抜していると考えられる。

それは、対象が狭いということであり、入試制度上のデメリットと捉えられそうだが、学力検査で測ることのできる「教科学力」の高いだけの学生ではなく、当該の専門領域に関する意欲・関心が高く、活力ある学生を求めるというアドミッション・ポリシーを立てて、そのような学生を受け入れたいのであれば、決してデメリットばかりではない。

5.2 実施内容及び入試方法

本学のAO入試募集要項の冒頭に、選抜の考え方として、「受験者一人一人が持っている将来の夢や、ぜひ広島大学で学び、研究してみたいという強い意欲を重視します。」
「自分の意見を他の人にわかりやすく伝えた

り、他人の意見を理解し行動したりする力などを、（中略）評価します。」と記載されているように、志願者の専門領域にかかわる興味・関心や意欲等の情意面を高く評価することを謳い続けてきた。

そのような情意面を評価する方法として、学力検査（ペーパーテスト）ではなく、各学部・学科のアドミッション・ポリシーに従って小論文、面接、実技、出願書類及びプレゼンテーション等を組み合わせて実施している。

このように、学力検査を主として利用して教科学力の高い者から合格者を決める（その前提として、暗黙の裡に、学力検査の得点の高い者即ち教科学力の高い者は同時に学問への意欲・関心等情意面の質も高く、人間性、社会性においても大学生活に適合した者が多いはずとの認識が共有されている）一般入試では掬い取れない者の中にも、大学の期待するアドミッション・ポリシーどおりの興味・関心や意欲等を備えた人材がおり、それらの者をAO入試によって判別して合格者・入学者としたいというのが、変わらぬ基本的な考え方である。

しかしながら、情意面の評価だけでは、国立大学が求める学力面の裏付けが乏しいことから、学力担保の方法として、大学入学センター試験（Ⅱ型）、ゼミナール等を通じての学力把握（Ⅲ型）、面接中での口述試験的な設問、英語による小論文を通じての語学力の評価等が選抜方法として考えられてきた。

6 おわりに

AO入試を実施して来て抱く不安は、果たしてアドミッション・ポリシーに沿った学生が獲得できているのだろうか。かける時間や労力に見合うだけの学生が入学しているのだろうかという疑問である。AO入試入学生の学力不足が指摘される社会的風潮と相俟って、殊に一般入試入学生と比べて学力面で遜

色ないのかという問いも学内 FAQ の一つである。しかし、仮定として、AO 入試入学者が一般入試入学者と全く異なる学生

(像) であるとしたら、わざわざ時間と労力をかけて AO 入試を実施する意味はどこにあるのか、ということにならないか。要は、大学は AO 入試を通じてどのような学生を発掘し、受け入れようとするのかという問いに尽きるのではないか。

本学では、すべての入学者を対象にして入学までの学修や生活に関するアンケート調査をし、入学後の成績追跡調査を実施している。後者の追跡調査について詳述する紙幅はないので結論だけ述べるが、同一募集単位の入学者の学業成績 (GPA) について入試方式別にセメスターごとに追跡すると、AO 入試入学者の GPA が有意に悪いということはない。むしろ、一般入試前期日程及び後期日程入学者と比べ、AO 入試入学者の方が優れていると思われる募集単位が少なくない。

また、すべての AO 入試入学者について、卒業時に指導教員のアンケート調査を実施しているが、この調査においても、AO 入試入学者に関する高い評価が見受けられる。こうしたことから、本学の次期中期計画を見据えた大学改革の見取り図の中で、AO 入試を充実・発展させると記述されたところである。

一方で、AO 入試入学者の入学後の成績が振るわない募集単位もみられる。こうした募集単位には、継続的にその傾向が現われている。その原因と対応策について、未だ明らかにされていないのであるが、あらためて、AO 入試を通じてどのような学生を発掘し、受け入れようとするのか、またそのためにどのような入試方法を採用しているのかという問いに行き着くと考える。

さらに、AO 入試が高校にどのように受け止められ、進路指導がどのように反応しているのか、大学当事者の立場から分析して行く課題も残されている。

注

1) MD-PhD コース (医学部医学科—大学院医歯薬保健学研究科連携コース) とは、6 年間の学士教育課程 (医学部医学科) と 4 年間の大学院博士課程を 9 年間から 10 年間をかけて連携して行う研究者養成を視野に入れたコースである。

2) 広島大学では、毎年、広島県内のすべての公立高校校長を対象にした懇談会を開催し、大学入試等をテーマにして意見交換を行っている。

謝辞

AO 入試Ⅲ型と飛び入学に関して、聞き取りに御協力いただいた広島大学大学院理学研究科杉立徹教授に心から謝意を表します。

参考文献

広島大学入学センター (2009) . 『平成 20 年度入学者選抜に関する調査研究報告書』 .

広島大学 国立大学法人広島大学中期計画 (第一期) <

http://www.hiroshimau.ac.jp/upload/0/houjin/johokokai/gyoumu/tyuukikeika_ku.pdf> (2014 年 3 月 24 日)

杉原敏彦 (2005) . 「『ゼミナール選考』のねらいと成果」筑波大学アドミッションセンター編『高大接続のための大学入試～高大接続と AO 入試～シンポジウム講演論文集』 37-40 .

大谷 奨 (2013) . 「大学入試の多様化と進路選択・進路指導」東北大学高等教育開発推進センター編『大学入試と高校現場—進路指導の教育的意義—』東北大学出版会, 7-26.

木村拓也 (2014) . 「非ペーパーテスト型入試の魅力と限界」『教育人会議』 2014 冬号, 28-29 .